

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 小林亜子

本論文の骨子は、フランス革命の後半に共和国全土に設置された一種の中等教育学校であるエコール・サントラルについての分析である。革命期のフランスにおいては、新たな社会だけでなく新たな人間の形成も試みられており、その最大的手段と見なされていたのが公教育であった。当時最も重要視された公教育機関の一つがエコール・サントラルだったが、これまでその実態はほぼ不明であった。小林氏は、本論文の第一部、第二部でエコール・サントラルを長期的な展望のうちに位置づけた上で、第三部においてその創設と運営の実態を詳細に解明している。

フランス革命期の公教育には、子供を対象とする学校での教育と成人を対象とする祭典での教育の二つの柱があったが、これを受けて第一部では年齢概念の問題が検討される。旧体制期の「若者期」区分に革命期の「青年期」が取ってかわった点については先行研究で論じられているが、小林氏は先行研究の諸論点を整理した上で、旧体制期の祭典は若者にとっての教育の意味もあったことを示しつつ、このことが革命期の祭典を公教育の手段とする思考法に継承されたことを明らかにしている。

続いて第二部では、公教育の「公」の側面が検討される。革命の進行に伴って、それまで「公論」に代表されていた「公」なるものに「公共精神」が新たに加わり、公教育にかんする思考も変化していった。これを確認した上で小林氏は、家庭や地域社会にかかわって学校が公教育の主な担い手となり、学校という特定の場で子供を集中的に教化することによって精神も肉体も画一化された共和主義的フランス人を創造することが公教育の主眼とされていった過程を解明している。

第三部では、公教育における祭典の側面を継承しつつも新しい人間創造の場として登場したエコール・サントラルが分析される。革命政府が公教育を重視したため、この問題については当時盛んに議論がなされていた。そのため革命期前半の教育問題については刊行史料が豊富に存在し、とくに教育理論については研究の蓄積がある。この一方、革命の後半に実現した全国的な公教育については、史料の整理が進んでいないこともあって実態は未解明の部分が大きい。とくにエコール・サントラルについてはフランスの歴史学界でも本格的な研究はなされてこなかった。小林氏は未整理の膨大な文書館史料の長期にわたる詳細な調査にもとづき、エコール・サントラルの施設や教員、カリキュラムや履修状況などの諸側面を明らかにしており、第三部は内外の学界に貴重な貢献をなすものと言える。

本論文は、そのスケールの大きさのためもあるが、第一～三部の接合性において改善の余地が残されているとも思われるが、年齢概念、祭典、公共、公教育といった、それぞれ独自の研究蓄積と解釈が存在し、基本的に別個のものとして扱われてきた重要なテーマを、綿密な史料調査を踏まえて結びつけた野心作であり、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。